

(講演)

ダース・ベイダーはなぜ加害者になったのか

松原 拓郎

1 はじめに

今日のお話で皆様に持ち帰っていただきたいのは、「法律を本の中だけで学んでも仕方がないんだな。」「法律についてきちんと考えたければ、法律以外の違う世界も勉強しないとイケないんだな。」という実感です。

今日の話をする私は、普段は東京で弁護士をしています。やっている仕事はいわゆる町弁といわれるもので、日々、町で生活をしている方々の生活にまつわる紛争とかかかわっています。つまり、日常生活に密着している、現場の実務家です。

そのような私がここで時間を頂いて皆様にお話をする意味を考えながら、今日は、法適用の現場では今回のテーマになっている「法と人間科学の架橋」ということがどれほど大きな意味を持っているのか、ということについて、映画「スター・ウォーズ」に登場する「ダース・ベイダー」を例にとりながら、お伝えできればと思っています。

さて、皆様のうちの多くの方々は、法律を勉強し始めて数年の大学1年、2年生だときいています。

皆様はふだん、法律の勉強をどのようにしておこなっていますか？きっと、多くの方は、一生懸命教科書を読んで、六法を引いて・・・と勉強をしているのではないのでしょうか。



私もそうでした。そして、大学1年生のおわりころには、法律の勉強がとてつまらなくなっていました。教科書を開いても六法を開いても、そこ広がっているのは砂漠みたいなもので、頭にはさっぱり入ってきませんでした。

そのあといろいろあって私はあらためて法律の勉強をきちんするようになり、いまではこうやって弁護士になり、皆様にこのようにお話をするようになっていきます。今では私は、法律ってとても面白いものだと思うようになっていきます。

大学一年生の時との違いはなんでしょう。それに早く気付いていればよかったとおもうので、皆様に話したいと思うのです。

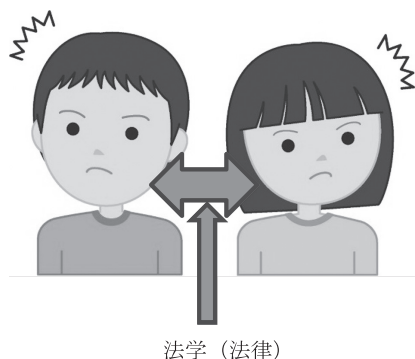
大事なのは、「法律」だけに興味を持って意味はないということです。法学以外の分野に関心を持ち、それらと法学とのつながりに関心を持ってください。そうすると、ひるがえって法律の勉強が楽しくなってきます。

何が言いたいのか？そこで、もう考えを少し進めていきましょう。

2 「法律」の使われ方

最初に、あたりまえのことを考えてみましょう。

法律は、どこで、どのように使われるのでしょうか。それは、紛争が起きた時です。民法は生活の中で人と人の間に紛争が起きた時にルールとして機能しますし、その紛争を具体的に解決するための民事訴訟では、民事訴訟法がつかわれます。人が人にけがをさせたときには、刑法でいう傷害罪として、刑事訴訟法に基づいた手続きがすすんでいきます。イメージ的にはこのような感じですね。



3 「紛争」の理解と解決

しかし、これは当たり前のことなのですが、実際には、紛争に法律を当てはめれば自動販売機のように答えが出て、みんなその答えに従う、というように、すっきり紛争が解決できるわけではありません。

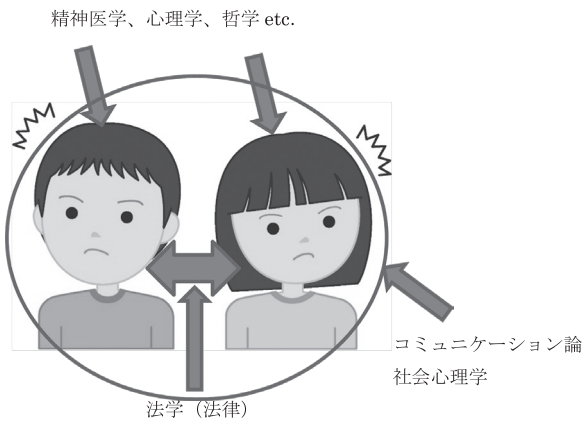
紛争が起きた時にはそれを解決しなければなりません、そのために

は、まず人がその紛争時に何を考えているのかを知らなければなりません。

それは学問で言えば「法学」ではなく「心理学」などの人文科学と言われる分野の話です。

また、人と人が紛争を起こしているということはそこに2人以上の社会的な関係が成立しているということですが、そこに生じる人と人のコミュニケーションについては、社会心理学などの社会科学の分野がカバーしています。

イメージ的には下の図のような感じですね。



このように、法律を知っているだけでは、紛争の実態（その紛争がどんなプロセスで起きて、「解決」するうえで何が問題なのか）を理解することはできません。そして紛争の実態を理解できなければ、紛争を解決する

ことはできません。

紛争を解決できなければ、法律があっても意味なんてありません。解決したと思っても、それは裁判官や検察官、弁護士のただの自己満足です。つまり私たち法律家は、紛争を解決したければ、なぜ人は紛争を起こすのか、どうすれば人は紛争解決に気持ちが向かうのか、といったことをまず考えて、知る必要があるのです。

4 人はなぜ紛争を起こすのか～ダース・ベイダーを例にとる

ではまず第一に、人はなぜ紛争を起こすのかを考えてみましょうか。

今日はここで、加害者の心理を例にとっかんがえてみたいと思います。

そうは言っても具体的な事件の実例を上げるわけにもいけないので、ここで

は映画「スター・ウォーズ」(エピソード1～7まで、現在まで全7作公開)から、重要登場人物「ダース・ベイダー」の心理を例にとって、なぜ元々は優しい男の子だった彼が成長してのち「加害者」になってしまったのか、という視点で考えてみたいと思います。

まず、スター・ウォーズのあらすじを簡単に説明し、同時にダースベイダーの個人史を振り返って、その心理形成過程を見て行きたいと思います。あらすじを詳しく話すとそれだけで相当長くなってしまいますので、簡単にします。興味があれば、ぜひ映画そのものを観てください。

<あらすじ>

登場人物はアナキン・スカイウォーカー。惑星タトゥイーンで母親と一緒に暮らす幼い子どもです。身分は奴隷です。

実はアナキンには、「フォース」という不思議な特別な力があります。フォースとは、この世界では、ジェダイと呼ばれる、正義の守護者たる特別な騎士のみが操れる力です。そのフォースをこの奴隷の子がもっていること、しかもその力が非常に強いものであることに気づいたジェダイの騎士が、アナキンを奴隷の身分から救い出し、この世界の危機を救うためにジェダイの騎士として育てようと、本人と母親を説得し、母親と別れさせ、連れて行きます。

それから10年ほど経ち、アナキンは修行を積み、正義感の強い、たくましい青年に成長していきました。しかし、アナキンは力は強いものの、まだ精神的に未熟なため、まだ「ジェダイ」の称号を名乗ることは許されていません。アナキンは非常に感情的な青年でもあり、よく笑い、泣き、怒り、興奮する性質を持っていました。

アナキンは修行を積み、また恋愛もしていきます。しかし実は、ジェダイには恋愛はご法度でした。アナキンは、恋愛をしている自分とジェダイを目指す自分との間で苦しみ、また自身の力には自信があるのにいまだにジェダイとなれないことについての不満(なお、ジェダイとなるには、ジェダイたちの最高決定機関「ジェダイ評議会」の承認が必要です。)がつのっていきます。

そのような中、故郷に残っていた母親が惨殺されました。アナキンは、ジェダイになろうとして修行を積みながら母親を守れなかったことに強いショックを受け、理不尽と強固な怒りを感じます。

さらにそのような中、隠れて交際していたアナキンの彼女が妊娠しました。アナキンは、母親に続いて今度は彼女をも失ってしまうのではないかという強烈な不安に襲われます。

そこに、彼の力に目を付けた暗黒世界の勢力が、彼を利用しようとしのびよってきます。暗黒世界の「皇帝」はアナキンの力を賞賛し、そのアナキンをジェダイにしないのはジェダイ評議会の嫉妬、恣意であるとして、アナキンの不信を煽ります。そして、ジェダイの力では彼女を守ることはできない、このままでは彼女は母親と同じように死ぬだけだ、彼女を救うには暗黒世界の力（＝憎しみの力）が必要である、などと誘惑します。

自己の能力を賞賛され承認欲求を満たされたアナキンは、彼女を失う恐怖から、ついにジェダイを裏切り暗黒世界（ダークサイド）に墮ちることを決意し、皇帝の強力な手下「ダース・ベイダー」として、皇帝の指示に盲従し、あらゆるものへの憎しみのもと、宇宙戦争での大量殺戮の指揮を取っていくのです（こままでがスター・ウォーズエピソード1～3）。

5 アナキンのダークサイドに転落し「加害者＝ダース・ベイダー」になった理由～人はなぜ紛争を起こすのか

さて、アナキンの「正義」から「加害者」への転落の理由は何でしょうか。言い換えれば、ここで「ダークサイド」が象徴するものは何でしょうか。ここではまず、なぜ人は紛争を起こすようになってしまう（加害者化）のか、について考えてみましょう。

これは、法学のみを学んでは分析不能です。ここではこの転落＝加害者化の理由を、心理学～精神医学の側面からと、社会心理学の側面から仮説を立ててみたいと思います。

たとえば精神疾患の一つに、「パーソナリティ障害」というものがあります。

これは社会生活をトラブルなくやっていくことが難しい特性を持つ障害で、原因はまだ未解明のところもありますが、たとえば成育歴などが影響をすることも考えられています。被虐待児がのちにパーソナリティ障害を発症する、とようなことが、成育歴による影響の例として挙げられます。そこでここでは、アナキンがパーソナリティ障害ではないかという仮説に基づいて、彼を見ていきましょう。

アナキンは、幼少期に奴隷体験をしています。そして、唯一の家族で会った母親との別離を、幼くして経験しました。これは「愛着関係の喪失」といわれる体験です。このような成育歴の影響とアナキンの生来的素因とが合わさってパーソナリティ障害となったという仮説は、十分にあり得るところです。

パーソナリティ障害の診断基準¹を少し見てみると、まず、境界性パーソナリティ障害（診断基準＝DSM-v：301.83（F60.3））に合致の可能性があります。これは、見捨てられ不安、不安定で著しい対人関係、感情の不安定、不適切で激しい怒り、怒りの制御困難といった特徴がみられるものです。また、「自己愛性パーソナリティ障害」（診断基準＝DSM-v：301.81（F60.81））にも合致の可能性があります。これは、自分が重要であると言う誇大な感覚、限りない成功・理想的な愛の空想、自分が「特別」との確信、特権意識などに特徴があります。

このようなパーソナリティ障害の方の逸脱行動（感情不安定、制御不能の怒り、誇大感覚や特権意識に基づく行動等）には、社会的には単なる「性格」だとか、ただの「弱さ」だとか言われがちなものがあります。

しかし、そもそも「性格」とは何でしょうか。また、人間の行動はどのようにして決まるのでしょうか。言い換えれば、人の行動はどこまでが「コントロール可能」なのでしょうか。

人間科学＝ここでは精神医学や心理学の面から科学的に見ていくと、パーソナリティ障害にみられるような行動は、単なる「性格」「弱さ」「わがまま」と片付けるようなものではなく、実は本人にもコントロール困難な状況なのではないか、ということが見えてきます。そうするとその次には、紛争を起こしてしまった人に語りかける際にも、また繰り返さないために対策を考える際にも、

¹ 「診断基準」は本来機械的にあてはめるべきものではないので、注意が必要です。本稿では話をわかりやすくするために、あえて簡略化して説明しています。

ただ「強さ」を求めたり理屈で説明する、または「違法なことをしてはいけない」と説くだけでは効果がないのではないかと、ということが見えてきます。

この話は、「本人にはその行動をどこまで帰責可能なのか」「行為に対する責任とは何か」というような点で、たとえば刑法の「責任理論」へリンクするような問題です。また、「どのように処遇すれば再犯が防げるか」という点で、①その人の再犯防止（特別予防）②社会的な再犯防止（一般予防）ということを考える、刑法の「刑罰理論」へリンクするような問題です。

次に、社会心理学の面からアナキンの転落を見ていきましょう。

社会心理学には、「公正」という観念が登場します。

たとえば、「公正世界理論」と言い、「人は『世界は人が自分自身にふさわしいものを受け取ることができる公正な場所である』と信じたいという欲求（公正世界欲求）を持つ。」という理論があります。すなわち人は、不公正な事態に遭遇・目撃すると、公正さを求める反応を示すのです。たとえばこれは、理不尽な犯罪被害にあった被害者に対して、「そのような理不尽なことが起こる不公正な世の中のはずではない→きっと被害者にも相応の落ち度があったに違いない」というような「被害者非難（被害者バッシング）」などにつながっていく話です。

アナキンは①自分はジェダイにふさわしい力を持っているのにジェダイになれない、という「不公正」感を持っていました。また、②自分には何の落ち度もないのに、そして真摯にジェダイ修行に取り組んでいるのに、大事な母親を無残に殺されました。

そのような世の中の「不公正」は、アナキンは受け入れがたいものでした。これは、今の状況は自分自身に原因があるのではなく自分以外に原因がある、自分が信じてきた「ジェダイ」という価値観にそもそも誤りがあるのではないかと、それがこの不公正を引き起こした原因ではないか、という考え方につながりました。

そして、③このうえさらに彼女を失うような不公正を避けるためには（「愛着関係形成」に重大な問題を持っているアナキンにとっては、彼女を失うことは自分のアイデンティティの基盤を失うに等しい問題でした。）、これまでの「ジェダイ」という価値観を捨て、自分が否定してきた「ダークサイド」とい

う価値観を肯定しなければならないのではないか、その力を身に付けなければいけないのではないか、という発想につながっていきます。

つまり、アナキンがまじめに物事を突き詰めて考え、また彼女を失ってはならないものとして切実に思えば思うほど、さらなる「不公正」を避けるために、「ダークサイド」の方向に思考が行ってしまったものと思われるのです。

6 ダース・ベイダーの「回復」～どうすれば紛争解決に気持ちが向かうのか

では第二に、どうすれば人は紛争解決に気持ちが向かうのか、についても考えてみましょう。紛争解決を考える際、とくに刑事事件では、「反省」というキーワードがよく用いられます。そこで、ここではアナキンを例にとり、「反省」という文脈で、紛争解決を考えてみます。

罪を犯すに至った人に対しては、どのように語り掛ければ、「反省」をするのでしょうか。たとえばスター・ウォーズでアナキンは大量殺人等の罪を犯しましたが、そもそも、このアナキンに対しては「反省」だけ求めればいいのでしょうか。

アナキンが反省すべきものは何でしょうか。アナキンは、何のために／何に対して／どんな動機で「反省」するのでしょうか。そもそも「反省」とは何なのでしょうか。

さかのぼると、アナキンはなぜ自分の「ダークサイド」への転落を止められなかったのでしょうか。アナキンを責める前に、転落しそうなアナキンの気持ちを誰かが受け止める必要はなかったのでしょうか。アナキンは「極悪非道の悪人」だったのでしょうか、映画の最初の方に出てくる幼少期のアナキンのかわいらしい顔を見ても、そう思えるのでしょうか。

私たちは「法」に基づく手続きの中で、紛争解決を目指します。では、「紛争解決」とは何なのでしょうか。再犯防止、報復、賠償等、様々なものが考えられます。私はここで最後は憲法13条にいう「すべて国民は個人として尊重…」というように「すべての個人の尊厳が回復されること」が最終目標だと思っています。加害者の「反省」も被害者・加害者が回復するための段階の一つだ

と考えていますが、その段階を進み解決に進むことを可能にするためには、まず何をしなければいけないのでしょうか。

解決のためには私たちは加害者に語りかけなければならず、加害者に語りかけるためには、私たちは、加害者が加害に至ったプロセスを理解しなければいけません。そして、その目的で加害者と接するときには、まず第一に「加害者」の人としての人間像を知り、そのうえで「加害者」に至った理由、背景を考える必要があります。これが、その後の加害者との対話で加害者とコミュニケーションを成立させ、理解を進める前提条件となります。たとえば少年事件で、少年の素因、成育歴、環境、発達心理等を考えるのは、そういうことなのです。

ダース・ベイダーは、エピソード6のラストで「善の心」を取り戻し、息子ルークが皇帝に殺されそうなところを救って、自分の精神を支配していた皇帝を倒し、そして死んでいきました。この「回復」の理由は何だったのでしょうか。

「スター・ウォーズ」エピソード3のラストでは、アナキンの彼女が死んでいくときに、彼女は、アナキンにも「善の心」が残っている、と周りの人に言い残して、息子ルークを出産して死んでいきました。その後、ルークも、残虐な父ダース・ベイダー＝アナキンと接しても、父にはまだ「善の心」が残っているはずと信じて対応しました（詳しくは、映画を観てください。）。映画ではありますが、このことは大きなヒントになるでしょう。²

「加害－被害」構造の紛争を解決するためには、加害者に六法を示して「違法」と言うだけでは、問題は解決しません。加害者を断罪する「判決」だけでは、紛争や問題は最終的には解決しないのです。^{3 4}

² 岡本茂樹「反省させると犯罪者になります」（新潮新書）なども参考になります。
³ たとえば、ヘイト・スピーチについて高額な損害賠償を命じる判決がありました（京都朝鮮学校襲撃事件、京都地判 平成25年10月7日、大阪高判 平成26年7月8日）、これでヘイトスピーチはなくなるのでしょうか。そもそもヘイトスピーカーはなぜこのような行動を起こすのか、「日本」への「愛」は、ヘイトスピーカーなりの「承認欲求」（不安表出）ではないのか（cf.毎日新聞2014.11.6夕刊「特集ワイド」“いびつな「大日本病」”）、それではこの承認欲求はなぜ生じたのか、など、人間科学的分析の必要があると思われます。

⁴ 加害者分析について、安田浩一「ネットと愛国～在特会の闇を追いかけて」（講談社）などが参考になります。

7 最後に

最後に、今日の振り返りをしてみたいと思います。

まず、実務家が話をした意味です。そこには、「法適用の『現場』で大事なことは何か」をお伝えするという意味がありました。そして、法適用の現場では、紛争への法の「適用」についての知識だけではなく、紛争当事者である人間への深い理解、想像力や、法の背後にある「意味」への関心や、法学の「できること」と「限界」の認識が必要ではないか、という趣旨の話をしてきました。そしてそこに、法学の限界をカバーするものとして“法と人間科学の架橋”という言葉の持つ意義があるのだ、ということをお伝えしたかったのです。

次に、「法適用の現場」がそのようなものであることを前提として、皆様には法をどのような姿勢で学んでほしいか、というお話をさせていただいたつもりです。学生時代に大事なことは何か、法学を机上の学問としてだけではなく、現場（人間）をイメージしながら学ぶことの大切さ、幅広い分野（人文科学、社会科学、理系知識等）へ柔軟かつ幅広い関心を持つことの大切さをお話したいと思って、今日のお話をさせていただきました。この幅広い関心が紛争解決の現場でもたらす実際上の効果に、“法と人間科学の架橋”という言葉の持つ意義があると私は考えています。

今日のこのつたないお話が、皆様のこれからの法律学習のささやかなヒントになればと思います。

[付記] この講演は「法と人間科学分の架橋」プロジェクトの一環として2015年11月10日に行われたものに修正・加筆をしたものである。